



## 「日本家族看護学会第32回学術集会」の報告と御礼

## 第32回学術集会長 今野 美紀

日本家族看護学会第32回学術集会は、「家族看護はえんむすび」をテーマに、2025年9月20日（土）・21日（日）の2日間、札幌市教育文化会館にて開催されました。北海道での初開催となり、788名（会員366名、非会員340名、学生82名）の皆様にご参加いただきました。企画運営委員を代表いたしまして感謝を申し上げます。

プログラムは、会長講演「家族看護はえんむすび」、特別講演「生み・育ての今を追う」をはじめ、教育講演2題（「患者、家族、社会との“えん”をむすぶために」「家族法改正—離婚後共同親権は子どもにとって福音なのか」）、シンポジウム3題（「ビジネスケアラーを支えるには」「こどもの声を聴く対話」「地域全体で子育て家庭を支える（日本乳幼児医学・心理学会との共催）」）、市民公開講座「発達障害の子どもと家族を応援する」など、多岐にわたる内容で構成されました。さらに、6つの委員会企画、25の交流集会、患者会セミナー、一般演題（口演40、ポスター55）、3つのオンデマンド講義が行われ、いずれの会場でも活発な議論が交わされました。本学術集会は、まさに「えんむすび」の名にふさわしく、人と人、知と知を結びつける場となりました。

参加者へのメールアンケートでは、「小児に偏った内容が多かった」との指摘もありましたが、「どのプログラムも良かった」「日々の業務にもやもやしていたが、参加して方向性が見えた」など、概ね好意的な評価をいただきました。運営面では、会場の利便性やスタッフ対応に高い評価を頂戴した一方、受付業務などに課題も見られました。不行き届きの点があったことにつきましては、何卒ご寛容いただければ幸いです。最後に、ご参加くださった皆様、ならびに準備・運営に携わってくださった関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。



## 交流集会「家族研究を家族支援につなげるには」に参加して

## 東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野 森崎 真由美



第32回日本家族看護学会学術集会在盛会のうちに終了しましたこと、心よりお祝い申し上げます。今回の学会では、東京大学家族看護学分野の同窓生と現教室員が中心となり、「家族研究を家族支援につなげるには」をテーマとした交流集会を企画しました。

私は3名の演者の一人として、「患者の変化を通じて家族関係に働きかける研究」というタイトルで、博士課程で実施した研究と、その後約10年続けている臨床実践について発表させていただきました。池田真理先生、小林京子先生からは多角的な家族アプローチについてご発表があり、家族研究への新たな視点を得る貴重な機会となりました。

会場からも実践への応用や支援方法に関する活発な意見が寄せられ、家族看護への熱い思いを肌で感じました。また、学生時代の恩師である上別府圭子先生に指定討論をいただいたことで、3つの発表が一つにつながり、家族看護の意義が深く腑に落ちるとともに、学生時代を思い返して熱い思いがこみ上げました。家族看護の発展の一端を担えるよう、気を引き締める機会となりました。

## 交流集会「現場発信！！患者と家族の意見が対立しているとき、どうしたらいいの？

事例から紐解いてみよう」を企画・運営して 企画者代表：東海大学医学部看護学科 小泉 織絵



爽やかな秋風が吹き抜ける札幌で開催された日本家族看護学会第32回学術集会。今野大会長をはじめ運営事務局の皆様のお力添えのもと、本交流集会も実り多い時間となりました。

テーマは、現場でしばしば直面する「患者と家族の意見の対立」。血液疾患の事例を通じ、患者の「幕引き」の願いと、家族の「一日でも長く」という切実な思いがぶつかる場面を提示しました。会場は一瞬静まり返り、参加者の真剣なまなざしが課題の重さを物語っていました。

しかし、対立の背景にある家族それぞれの価値観や家族の歴史（Family History）を丁寧に紐解くと、場の空気は次第に変化していきました。「看護師は、もつれた糸を解く熟練の職人のようですね」という言葉に笑顔と頷きが広がり、葛藤の奥にある隠れた愛情が浮かび上がるプロセスを参加者とともに共有しました。

このピンチを家族の力へと変えていく「調整役」としての看護の醍醐味を分かち合えたことは、私たちにとってかけがえのない「えんむすび」となりました。対立を「対話の始まり」と捉え直す契機となれば幸いです。



このピンチを家族の力へと変えていく「調整役」としての看護の醍醐味を分かち合えたことは、私たちにとってかけがえのない「えんむすび」となりました。対立を「対話の始まり」と捉え直す契機となれば幸いです。

## 国際交流委員会企画「つながる、広がる、変わる家族看護：国際交流が開く未来」

～IFNAとともに進む日本の家族看護の国際化を目指して～

東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野 下山 結衣

第32回学術集会にて、国際交流委員会企画の中で発表者として参加する機会をいただきました。本企画では、国際交流委員会がこれまでに実施してきたsmall group活動の紹介・報告に加え、海外学術集会での発表経験をもつ会員が、自身のキャリアと国際活動を重ね合わせながら体験を共有しました。

私自身も、昨年度のsmall group活動で新しく出会った仲間と文献レビューに取り組み、国際交流の場となるセミナーで英語によるプレゼン発表に挑戦した経験についてお話ししました。small groupへの参加を通して得られた新しい仲間との出会いや重ねた議論、そこから広がった新しい視点、そして十分な準備を重ねて仲間とともに発表を乗り越えられたことは、大きな学びとなりました。



学会当日の会場では皆さんからの質問を通して、会場に国際活動に関心をもつ方がいらっしやることを実感できたことも励みとなりました。今後も、国際活動や海外の学会への参加など、一歩ずつ、時には思い切って飛び込んで挑戦していきたいと、気持ちを新たにしました。



## 日本家族看護学会 第33回学術集会のご案内

テーマ：コンフリクトから調和を生み出す家族との伴走

学術集会長：瓜生 浩子

(高知県立大学 看護学部 教授)

会期：2026年8月29日(土)～30日(日)

会場：高知市文化プラザかるぽーと

(高知県高知市九反田2-1)

演題募集期間：

2026年2月1日(日)～4月24日(金)

詳しくは学会ホームページをご覧ください

<https://procomu.jp/jarfn2026/>



## 研究奨励賞

### 受賞論文

高機能自閉スペクトラム症 (ASD) の母親とその子どもが「育てられた」「育てる」経験を通して紡ぐ関係性 (2025年 第30巻 掲載)

### 著者

加藤 まり、門間 晶子 (敬称略)

## 2025年度 家族看護グッドプラクティス賞

「妻の体験から一働き盛りに高次脳機能障害になった人の家族支援を考える」

### 受賞者

藪中 弘美、宮田 孝子 (敬称略)

＜編集後記＞ ニュースレター第21号をお読みいただき、ありがとうございました。ご寄稿くださいました皆様に感謝申し上げます。第32回学術集会の報告を中心とした本号は、研究から実践へ、また、現場発信からつながった「えんむすび」、国際活動を通じた広がりといった点から家族看護の“えん”＝つながりを感じ取ることができました。様々な“えん”が家族看護の発展に結びつくことを心より願っています。 担当委員：松坂 由香里 村田 翔 委員長：荒木田 美香子